

ヤママユとカイコの違い

ヤママユ(天蚕)^{てんさん}

ヤママユは我が国在来の代表的な^{やさん}野蚕である。日本原産の大型絹糸昆虫で、ほぼ日本全土に生息するほか各地で飼育もされている。この幼虫が吐く天蚕糸は、太く、丈夫で天然の輝きがあり、「繊維のダイヤモンド」と言われている。

クヌギ・ナラ・アラカシなどの葉を食べる。飼料樹の葉を寄せて黄緑色の繭をつくる。



カイコ(家蚕)^{かさん}

絹といえば、農家の養蚕室で桑の葉で飼うカイコの繭からできる生糸であることは広く知られている。一般に流通している絹はほとんどがこの「家蚕(いわゆる白い繭)」です。人が与えた桑の葉を食べ、繭を作る際にも人工的な、まぶし(枠)に入れてやらないとうまく繭を作れない。



可部地方の「山まゆ織り」の歴史

広島市北部の安佐北区可部や安佐町一帯で、かつて山まゆ織りが盛んに行われていました。

山まゆ織りがいつごろから始まったのか明らかではありませんが、文献に初めて現れるのは、元文4年(1739)の『吉長公御代記』巻35で、広島藩の特産として、山まゆ織りの製法とともに山まゆ地2反とまゆ上中下3品を幕府に差し出したことが、記録されています。

山まゆ織りは、軽くて丈夫で肌ざわりが良く、冬に暖かいという評判が広まり、山まゆ織(山まゆ紬、可部紬)の商標で全国にその名をとどろかせました。

明治時代の終わりごろから、ますます盛んになり、大正元年(1912)にピークを迎えましたが、大正時代になり、新しい織物(人絹など)が大量に機械生産され安く売られるようになったこともあり、次第に作られなくなり、昭和2年(1927)を最後に途絶えました。

(注)広島藩5代藩主 浅野吉長(1708~1752)

参考：広島市教育委員会『山まゆ織り』1988



山まゆ織と包装紙・商標：広島市郷土資料館蔵

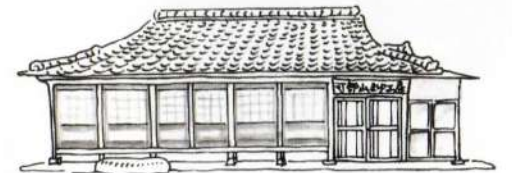
※柳宗悦は著書『手仕事の日本』(1948)の中で、広島の特徴ある手仕事として、何よりも「山繭織」を挙げ「いつかきっと見直す人が出て再び立ち上ることと思います。」と記しています。

山まゆの話



可部山まゆ同好会

平成11年(1999)4月発足



可部山まゆ工房

平成24年(2012)3月開設

〒731-0222 広島市安佐北区可部東2-28-8

<https://kabeyamamayu.webu.jp/>

e-mail: kabeyamamayu@yahoo.co.jp



山まゆの一生



越冬卵
2～3mm

春4月上旬～下旬にかけて
ふ化を始める



ふ化瞬時
体長6～7mm



だっぴ
脱皮を繰り返し5月下旬以降5令になり
まゆを作る段階に入る（営繭）
えいけん



6月上旬からまゆができる



7月下旬頃から蛹が蛾になって出る

【山繭・天蚕】

ヤマムギ科のガ（蛾）黄褐色ないし暗紫褐色、翅に眼状紋と黒褐色の条がある。大形で、開帳約13センチメートル。幼虫は淡緑色で、体長最大8センチメートル。クヌギ、ナラなどの葉を食い、黄緑色で長球形の繭を作る。日本各地の山地に分布。

【山繭糸・天蚕糸】

山繭から採取した糸。繊維は太く、光沢・抗張力に富む。石灰質を含み染色や漂白が困難。

出典：広辞苑(第七版)2018



繊維のダイヤモンドと呼ばれる
山まゆの糸



オス蛾



卵



メス蛾

